第三室第二詩　獣の包帯

手当たり次第の予兆があった。
棘(とげ)のあるオリーブの枝を贈ることなど
あなたの常套手段(レパートリー)のひとつにすぎなかった。
あなたは私に一冊の本を差し出した
そこにはすべての答えが、
奇妙な方言によって暗号化されていて書かれていた。
サーペントのように波打つシンボルたちが、エサを求めて焦れている。

私が風に舞う種ならば
あなたは風を止ませ
私は茂みに落ちるだろう。
私が甘い水を切望すれば
あなたは私に苦い杯を渡すだろう
私が傷ついた小鹿なら、あなたは私を追い回すだろう
静かな隠れ家から追い出して、
冷たい石の角に追い詰めて
私の恐怖を嘲笑うだろう。

私が赴くところではどこでも、
愛を求める者を私は探している
しかし愛はマネキンのように自らを卑しめる
仕立屋のいいなりになって、
その衣服を着替えるマネキンのように。
その下には、獣の包帯が巻かれている。
その下には、救済の止血帯が巻かれている。
しかし、その殻の下には虚ろがある。
それはあまりにも傲慢で
煌びやかな服をまとい、
仕立屋も獣も、その虚ろに触れることができない。

あなたは、私の魂の探求を誤ったのだ。
知恵の群れの中を、ひたすら探し回っただけだった。
私があなたに対して失ったものだけを見つけ出したにすぎない。
根の無い夢のように抱かれて
あなたの感触の中で私は消え去るだろう

その虚ろに向けた、あなたの熊手を手放せば
あなたは私のスピリットの塊を感じるだろう。
粉々になった鏡の小さな破片のような私を見つけるだろう。
バラバラになりながらも、一箇所に集められた鏡の破片を。
破片たちは、いまだに空を見つめ
いまだにひとつのモザイクのイメージを反射している。
それでも私自身を奏でながら。